



Title	W. Somerset Maugham覚書 : Our Bettersについて
Author(s)	鵜野, 清信
Citation	大阪外大英米研究. 1966, 5, p. 116-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98967
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

W. Somerset Maugham 覚書

— Our Betters について —

鷓 野 清 信

1907年10月26日 “Lady Frederick” のロンドンにおける上演は初日から18カ月のロングランを通じて大入満員の大成功であった。運がむくというのは不思議なもので、この大当りがきっかけとなって、それまで大して問題にされなかった Maugham の戯曲がつぎつぎと取上げられ、一時は彼の四つの劇が同時に上演され文字通り一躍ロンドン中の話題の中心になったという。その頃の「パンチ」に Shakespeare が Maugham の芝居のポスターの前で爪をかんでいる諷刺画が現われたということは、彼の成功の華ばなしさを如実に伝えるエピソードである。これを契機として彼の懐には急に大金が転げこむことになり、「客間」の常連として歓迎されるようになったが、そこではイギリス帝国の政治がまるで個人的な仕事でもあるかのように主人と客たちが話しあっており、当時の貴族や金持連中の腐敗と無能振りをまのあたりに見たのである。こうした突然の幸運にめぐりあった人間の大多数を待ちうけている落とし穴と、その結果としての不幸な運命はわれわれの周囲にもその例が少くないのであるが、Maugham の場合は大いに趣を異にしていた。即ち彼にとっては、金の効果は快楽を求め贅沢趣味を満足させることにあるのではなく、金があるということは他人から煩わされることなく、大衆に阿る必要もなく、全く自由な立場で自己の芸術活動を存分に遂行することを可能ならしめることに他ならなかった。このことは Maugham のように著しく内向的な性格の芸術家にとっては頗る重要なことであった。The Summing Up の22章で自らの性格を分析している通り、彼は「酔うことができず、他人に対して大きな愛情を抱くことができない。世間の人たちが示す狂噪状態には、いつも反撥を感じる。歓喜や悲哀の

はげしい感情に身をまかせた群衆の真中にいるときほど、超然たる気持になることはない」のである。

さて、Maugham の一連の喜劇は殆どが comedy of manners であり、上流社会、いわゆる society の習俗生態を客観的に描いて、機智と諷刺をふんだんに盛りこみ、軽妙洒脱味を貴び、野暮を最も軽蔑する手法、換言すれば、s sophistication の妙味を満喫せしめることを本旨としている。この category はモリエールに源を発し、イギリスでは Sheridan, Goldsmith を経て世紀末に再び Wilde によって受継がれた形式である。この系統の Maugham の作品に続いて、1915年に発表されたのが Our Betters であって、1919年の The Circle と共に Maugham の戯曲の最高峰を示す作品とされている。

Our Betters の筋を説明することは困難でもあり又殆ど無意味でもある。この劇に登場する婦人たちは、もとアメリカの金持娘たちであって新世界の女たちの、古い伝統に対するコムプレックスの現われとしての爵位への激しい欲望から、イギリス貴族たちと結婚することによってその虚栄心を満足させている連中である。そして作者は彼らの無知と背徳を冷然たる第三者の眼で眺めながら、その無知と背徳の愚かさを舞台一杯に繰りひろげて見せることによって観客の中に哄笑を巻き起こすのである。

19世紀の沈滞した英国戯曲界の代表的な復興者として Shaw と Wilde の二人を挙げ、笑う哲学者 Shaw をいわゆる思想劇の父とするならば、Wilde は娯楽喜劇の父というべく、前者の系列に Priestley を、そして後者の系列に Maugham を、特にその Our Betters や The Circle を置いて考えることは常識のようになっているが、これらの作品に対する評価は概して香しいものではない。代表的な酷評としてしばしば引用されるものに Fraser の批評があるが、要するに Our Betters は Henry James の作品と比較する場合、結婚してヨーロッパの貴族社会にはいった金持のアメリカ婦人に対するイギリス社会生活の影響という同一テーマを取扱いながら Maugham の筆は James に較べてあまりにも「なま」であり単純である。前者の描く人物は全く寄生虫的で

あり典型的であって、後者の細やかな心の動きというものが描かれていない。この作品に見られるように Maugham の戯曲は farce と境を接するメロドラマであり、その網の目は強く巧みに編まれているとはいえ、その目はあまり大きいために人生における重大事の大部分がもれて行ってしまうのである。以上の批評はたしかに傾聴すべき真理を含んでいるが、しかし同一のテーマを取扱っているとはいっても戯曲と小説では自から手法を異にする筈であり、殊に comedy of manners として書かれている点を考慮のうちに入れるべきである。少くとも Our Betters はその範疇の中において達し得る頂点を示すものである点は認めなければならないと考える。山本修二氏は Our Betters 及び The Circle の註釈書の序文に次の通りに述べている。「この劇 (Our Betters) には思想もなく主張もなく判断もなく、厳密な意味の plot もない。ただ一つ油の如く濃厚な雰囲気、彼ら全体を包んでいて、その中では、日常社会の感じ方や考え方が、かえって異様に不調和に感ぜられ、軽佻、遊墮、倦怠や、そこから生れ出る無意味な警句などが、かえって自然に感じられる……………いわばこの作品は戦前の思想劇から Coward の sex plays へ赴く一つの橋渡しとなったところに、演劇史上の重大な意味がある。」

Maugham の成功も当時の劇評家たちからの酷評か黙殺を受ける結果となったが、彼の側からもまたいわゆる劇評家なる人種に対して彼一流の痛烈な皮肉を浴せている。Maugham によれば、戯曲は作者と俳優と観客との緊密な合作でなければならないが、「批評家は感じるためでなく裁くためにやってくる……戯曲は批評家に見せるために書くのではない。」(The Summing Up, sec. 38) Maugham 流にいえば、芝居見物は講演会を聴きにゆくのではなく、娯楽を求めている以上、作者の心が「Footlight を越えて」直かに観客の心に通うことが大切であり、そのためには一種の「こつ」の体得を必要とし、さもなければ深遠な思想も鋭い性格描写も観客の心に訴える力とはなり得ないのである。Maugham が実験劇場のための「芸術的な」戯曲を書いている間は「有望な作家」であったが、大衆の心に通う楽しい劇を発表した途端に「マモンに魂を

売った男」になったのは皮肉である。

「マモンに魂を売った男」であったか否かは彼の自伝的長篇小説 Of [Human Bondage] の高い芸術性が明確な解答である。この点に関連して、K.G.Pfeiffer は次のように述べている。「自分を嘲笑する知識階級を嘲笑しながら、この上品で、気むずかしい上流社会のイギリス人は、彼のいわゆるより低い階級を擁護し始めた。彼が死ぬまで待ってはいるだろうが、やがて彼らは地上を相続すべきだし、また相続することだろう。このようなことが、皮肉な立場でいえるのは、Maugham がとりわけ知識人であり、彼の作品を軽蔑して話す知識人の大半よりもつと知識人の肩書を受ける資格があるからである。「作家の手帖」は、どれほど若い時から、どれほど真剣に人生の意味を見出そうとしてきたかを示している…………… Maugham の心には最高の教育を受けてきた人びとの間でもめったに出会うことのできぬ幅がある。大部分の知識人とは異り、彼は自分の知識をみせびらかすようなことはないのだ。彼といっしょに何日かをすごしても、彼が例えば普通のオックスフォードの卒業生以上の教育を受けているとは気がつかないのである。」(K.G. Pfeiffer: W. Somerset Maugham, a Candid Portrait 守屋陽一訳 P.38)

Maugham にとっては、芸術によって思想を説得することは無意味であり、彼はいわゆる思想劇の中に現実感を感じとることはできなかったのである。とはいうものの彼の写実主義もやがて壁に突当る時がきて、1933年劇界引退を声明し20余年に亘る劇壇関係の仕事に終止符をうったのである。彼は写実的な、散文による戯曲の行きづまりを予言したが、これはおのずから T.S.Eliot えのバトンタッチともいうべく興味あることといえよう。なお彼の劇界引退は単に写実主義の限界ということのみが原因でなく、先に述べたように、集団としての人間を好まなかった彼が、作家と俳優と観客の三位一体を要求する劇作の仕事に嫌悪を抱くに到ったこともその大きな動機の一つであろう。

それにしても、およそ Maugham ほどその作品が広く愛読されながら芸術家として冷遇されてきた作家は珍しい。彼のために一章をさこうとした文学史家

はなく、彼の作品を真剣に取上げようとする批評家も少い。彼がイギリス人の間であまり人気がないことは、彼がイギリスに定住することを好まず、又その作品の中で植民地に住むイギリス人の弱点を痛烈にあばいて見せたということも、気位の高いイギリス人としては面白くないに違いない。

1937年 *The Razor's Edge* の取材のために彼がインドへ行ったとき、インド人たちからは大歓迎を受けたが、現地のイギリス人たちは、この既に世界的に有名になっていた作家に対して頗る冷淡であったという。しかし彼は決してイギリスを愛さなかったのではなく、ただ Dover を間に挟む方がより深い愛情を感じたというだけであり、彼にとってそれは「遠くにありて思うもの」なのであろう。Maugham は単なる大衆作家にすぎないとする評価が殆ど決定的であるように思えるけれども、Maugham 自身は勿論そう考えているわけではない。彼が storyteller を以て任じていることは結局彼一流の皮肉にすぎない。ともあれ彼がはたして大衆作家なのかどうか、いわゆる the Maugham enigma を解く鍵の一つとして考えられることは、彼が今までに発表した膨大な量の作品が、それぞれ驚くばかりの variety をもっているにもかかわらず、その手法においては殆ど variety が見られないことである。いいかえると、彼は人間の外面的な行為や葛藤にばかり重点をおき過ぎて、人間の心の中に立入ることが少ないということである。このことは彼の傑作といわれている *Of Human Bondage* についても同様である。更に今ひとつ重要なことは、彼が *Of Human Bondage* を超える作品を遂に書き得なかったことである。要するに Maugham は一流の作家ではないかも知れない。「将来、批評家が何というかは、ただ推測してみるほかない。しかし Maugham は今以上の評価を受けるものと、私は考えたい。彼は生きている間、ほめられすぎたことはなかった。だから、ほめすぎられてきた者のたどる必然の運命、評価の下がってくるという運命を、彼は持たなくてすむであろう」(K. G. Pfeiffer, *ibid*, P. 187)

最後に木下 順二氏の *Our Betters* を含むいわゆる *Comedy of manners* に関する興味ある分析を要約紹介してこの雑文の結びとしたい。即ち *Our*

Betters の如き作品が日本には殆どなかったし、現在も殆どないという事実である。これは一体何を意味するのであろうか。実は Maugham の作品を含めて17世紀以降のヨーロッパ演劇全体の場面設定の問題に帰着するということができる。即ち Our Betters を始めとして comedy of manners と称せられる戯曲は殆ど全部がその場面を「客間」に設定しており、いわゆる「客間喜劇」という専門語が生れたほど客間の芝居がヨーロッパには多いのである。これは客間がヨーロッパにおいては社会の縮図的存在であるために劇作家にとって甚だ便利な「場」であり、しかも観客にとっても何等の説明もなく納得できる「場」なのである。一方日本の社会の中でそのような「場」を求めるとすれば、かつて新派華やかなりし頃の「待合」がこれに当るといえるのかも知れない。Our Betters や The Circle などが書かれた頃、即ち大正期の日本を引合いに出すとすれば、結局このような対比しかできないわけであり、これがそのままヨーロッパと日本の演劇ならびに社会の対比でもある。Our Betters のような劇が日本に存在しないのは、本質的に日本の社会に「場」がないということである。Eliot の Cocktail Party に関しても同様のことがいえるわけであって、日本の劇作家たちは依然として日本の社会にそのような「場」のないことに苦しんでいるわけである。なお、Our Betters などその年代の古さから、その中に見られる古い要素は己むを得ないとしても、それを同時代の日本の戯曲、例えば菊池寛の「父帰る」などと比較して見ると Our Betters などの方が遙かに「現代」があるのはどういうことであらうか。